

◎太閤秀吉と太閤(背割)下水

■ 太閤(背割)下水

豊臣秀吉の大阪のまちづくりにあたっては、土地が低湿であったため、堀川と呼ばれる人工の運河を開削し、そこから出た土砂を用いて土地のかさあげを行い、町屋の敷地としました。

慶長3年(1598年)に整備された船場地区では、大阪城に向う東西路を軸に、碁盤の目状に整然と区画され、その道路に面して間口を持つ建物の裏側、すなわち建物が背中合わせになっているところに下水溝が作られていました。このように建物と建物の背を割って作られていたことから「背割下水(せわりげすい)」と呼ばれ、当時の船場地区は、この背割下水にはさまれたほぼ42間(76.4m)四方の区画が町割りの基本となっていました。また、太閤秀吉にちなんで「太閤下水(たいこうげすい)」とも呼ばれています。

太閤(背割)下水は、通常幅1尺(30.3cm)から4尺(1.2m)、大きなものは1間(1.8m)から2間(3.6m)に及ぶものもあり、工法は、初期には素掘りのものでしたが、後には石垣で護岸が施されています。この下水溝は開渠(※)であったので、道路の横断部には石の蓋が置かれていました。

こうして、市中の下水は、太閤(背割)下水に集められ、おおむね東西の横堀川に排水されていました。

※開渠: 上部に蓋のない水路のこと

■ 三郷町絵図(大阪城天守閣蔵)



■ 太閤(背割)下水の維持管理

江戸時代には、できあがった下水溝の維持管理も各町内の町衆の手で行なわれていました。

下水溝の清掃は、「水道浚え(さらえ)」と呼ばれ、例年春から梅雨期までに、隣接する町が相談しあって日を決め、同時に行っていました。

また、下水溝の補修も町衆が寄って費用を出しあい行なっていたことが文献にも残されています。



■ 大水道普請入用帳

現存する太閤(背割)下水の築造時期について

中央区で実施した発掘調査により、現存する太閤(背割)下水の石組みが豊臣時代に遡るかどうかは確認されておりませんが、江戸時代後期に築造されたことは判明しています。

また、慶安1年から万治1年(1648~1658年)の「三郷町絵図」には、中央区南大江小学校付近に水路

が描かれており、江戸時代前期にはすでに水路が存在していたことがわかっています。

このことから江戸時代前期に素掘りの水路が掘られ、江戸時代後期に同じ位置に石組溝が築造されたと判断されています。